

A夫とのひとときを通して考えたこと

梶田 正子

ある冬の朝、私はA夫と共に園庭に出た。

四歳児のA夫は、今、おとなと一対一のかかわりを強く求めている、担任から「そのようなA夫の気持ちに配慮しながら、彼の中に幼稚園生活の体験を積み重ねていくことを重視したい」という保育方針が、少し前の保育者同志の話し合いの場にも出されたところである。

「何たべる？」と唐突に言われ、先日A夫が砂場で「ゼリー作ってるの」と言っていたのを思い出して、「そうねえ、ゼリーが食べたいわ」と答えて、A夫と私は砂場に入った。A夫は既に砂場で遊んでいる数人の子どもの達の様子をチラッと見ながら、道具棚にひとつ残っていたバケツと落ちていたまごとのフォークを手にとって、彼等とは少し離れた場所にしゃがみこ

んだ。今日はA夫とゆっくり過ごそうという思いで、私もA夫とやらんでしゃがんだ。A夫は、私に向かつてゲームやテレビ番組のキャラクターの名前を交えて会話しながら、バケツに砂を入れてかきまわしている。「これ、カントリーマームなの」(あら、ゼリーではなかったのかしら)と思いつつ「そろそろ食べられそうかしら」と聞いてみると「まだ、だめ」とA夫。しかし程なく「食べよう」と言つてバケツを持つて立ち上がった。「え?」、砂場でごちそうを食べることをイメージしていた私は一瞬面喰らつたが、「向こうで食べるの」というA夫に従つて後をついて行つた。A夫はバケツとフォークを持つて園庭の端近くまで歩いて行き、そこにしゃがみこんだ。その場所が、ゆうぎ室前のテラス近くではあるがテラスの前でもなく、藤棚のそばでもあるがその下とも言えず、何とも中途半端な場所であつたので、私は再び面喰らつて中腰のまま、あたりを見まわした。「ねえ、早くこちち向いて。

食べよ」と言いながらA夫は、私のからだをひっぱつて、園庭全体と他の子どもにも背を向ける方向でしゃがむことを促した。促されるままに私はしゃがみ、再びA夫とやりとりしながら、バケツの中のごちそうを食べた。私はその時初めて、私にとってはひどく中途半端に思えるこの場所、このからだの向きが、A夫にとつてはとても意味があり、その時求めているものであることに気がついた。他の子とのかかわりのない場所としてA夫はここを選び、私と二人だけでごちそうを食べたかつたのであろうと思う。

その後A夫と私は、お山と呼んでいる園庭の築山に登つて行つた。山への登り道についても、A夫は強くこだわつて、いくつかある登り道のひとつと一緒に登つた。真冬の時期でもあり、あまり人影の多くないお山で、A夫は「こちちに行こう」「今度はこちち」と私を従え、誰も使っていない遊具を選んでアスレチック風の滑り台によじ登つたり、三角形のログハウ

スの屋根をのほりおりすることを繰り返した。誰も居ないと思つて走り込んだ土管の中では、二人の年長女児がごぞを敷いてままごとをしていた。突然の侵入者に女兒たちは驚いて「やだあ、やめてよお」と大声をあげ、A夫もびつくりし、私も、ごぞがあるとはいへ冷たいであろうコンクリートの土管の中に座つて遊んでいる子どもの様子に驚いた一瞬もあつた。土管の中の女兒たちばかりでなく、築山の下の園庭の様子が見わたせる滑り台の上で、手すりにもたれかかりながら一人で園庭をながめている子ども、すっかり枯れた草むらにかがみこんで何かを探している子どもなど、思いがけない場所の思いがけない子ども達の様子を目にして、私はとても興味深く思つた。今はA夫との時との思いから、そばに寄つてみることも声をかけることもしなかつたが、それぞれの子どもにとつてそれぞれの方は、きつと大切な意味をもっているにちがいないと思えたからである。

築山から園庭におりる時、「先生はこつちから行こうかな、Aちゃんは？」
「こつち」。私とA夫は別々の道を選択したが、登る時のようなこだわりの様子は全く見られなかつた。

一緒に砂場に入った時から築山をおりてくるまで、A夫と私は一時間近くを二人で過ごした。そんなに長い時間の感覚は無く、むしろあつという間に経ってしまったひとときであつたが、また色々なことを考えさせられた時でもあつた。

私共の園は、都会のど真中にありながら園庭には大きく育つた樹木が多く、また起伏の多い変化に富んだ地形であるために、保育室から一見ただけでは見え



ない部分もたくさんある。子どもたちは、思い思いの場所で彼等なりの場を工夫し、時にはござやその他の道具も組み合わせながら豊かに遊びを展開している。

また、仲間から少し離れて、ひとり、気持ちの転換をはかろうとしている様子の子どももいる。このように、子どもたちの興味をかき立て、様々な思いを受けとめるに足る奥行きのある園環境に恵まれていることは、非常に幸いなことであると思う。

一方、私たち保育者には、子どもたちと生活する中でこの環境をより一層活用する方向で努力を重ねることが求められているわけであるが、こちらの現状は、子どもの数に対しておとなの数が十分でないことが残念でならない。保育者たちは現在も実に細やかに動いているのであるが、さらに、それぞれの子どもの思いにじっくりとつき合うだけのゆとりが持てることを切望するからである。

私がA夫と一対一でゆっくりかわることができた

のは、担任を持っていない立場であるからできたと言ってもよいかもしれない。A夫のような子どもを初め、それぞれの気持ちをそれぞれのやり方で表現する三十五人もの子どもたちの中で、たった一人の保育者は身を裂かれる思いがすることも少くはないのである。こう考えると、子どもの傍にいる保育者たちの声にならない叫びが伝わってくるような感じさえするのである。過日報告された、国立大学附属幼稚園副園長会による三歳児の保育場面の調査でも、一名の保育者に対する幼児数の過多が課題として指摘されており（副園長必携第三集）、何とか改善の道を探りたいものである。

（お茶の水女子大学附属幼稚園）